

第7回中心市街地活性化勉強会 報告書

日 時 平成21年9月18日(金) 19:00~21:00
場 所 小田原箱根商工会議所 会員談話室
経 過

中心市街地商業活性化アドバイザー佐谷氏の進行により進められた。
前半は各分科会を行い、後半は全体会として、分科会の内容について報告がされた。その後、両分科会の関連性について佐谷アドバイザーより解説がされ、意見交換がされた。

○両分科会の関連性について

佐谷アドバイザーより、「A・Bの各分科会が何で分かれていて、どういう関係があるのかについての整理として、下記の通り解説がされた。

- ・ランドデザインをやっていてぶつかってしまうのが都市計画。昭和24年に策定された。明治以降、戦時を乗り越えて苦戦してきた小田原のありようを追認した形で確定してしまっている。今になって「何故ここが商業地域なのか」「なぜ容積率がこんなにあるのか」の話がぶつかってきてしまう。しかしこれは簡単に変えられるものではない。景観条例などでそれに対して条例として皆に浸透していけばコンセンサスが得られるのではないか。しかしこの策定は神奈川県。神奈川県は県内の中で小田原の位置づけをしている。「小田原こういう街である」というのを認めてもらえれば変更する可能性はある(大変なことだが)。そのためには市としてのランドデザイン「こういう街になる」「こういう街にする」・・・という明確な意思とそれに対しての計画がないとできない。そのベースになるにはゾーニング等が提示できれば良いのでは。その中の一つのゾーンとしてB分科会の地域活性になる。「周りにこういうものがある」だから「ここはこの商業を含んだ活性化をするべきエリアなのだ」「それは具体的にはこういう形で活性化します」というようなストーリーにしてもっていかないといけない。そうすればB分科会がやっていることも整合性・必然性が出てくると考えている。そこまでもっていければ良いと思う。
- ・街かど博物館になるかどうかは別として、中町・寿町で何か無いだろうか。この地域はもとは木工・職人の町だったが、現在は技術的なものは衰退し、変わりにITやハイテク産業が入ってきている。昔ながらの木工なのか、ハイテク産業なのか・・・基本的には居住区と思うがその中でも、居住区の性格性や高さ等そういうところまでやっていければ。これがうまく点在すると町の回遊にももう少し良くなる。そうしたら回遊バスやコミュニティバスのようなものもやっていけたら良いと思う。

【意見交換】

松 本=Aチームが現在やっている歴史や伝統・文化を再編集して、問題提起をしてくれるというのは非常に良いこと。

佐 谷=気づきというものがでてこない「小田原どうしよう」という話になってしまう。

松 本=Bチームも一緒に、思いつきとジャストアイデアでは良いものはできない。やるために幾つかのくさびを作っていきたい。それが合体すれば一つの中心市街地の

方向性が出てくるかもしれない。

佐 谷＝ランドデザインを作るときに、検討する前提としてどんなもの・・・というベースとして「城郭都市」を置いて考えないといけないのか。そうすると「大外郭」や「城内」の問題や「街道筋」の問題が色々考えるファクターとして存在する。もう一つは逆に、商業地を含めて町がどのように変わって行ったのかが要素としてあるので含めていきたい。

あとは都市計画の話や、時代が一時の分散型からコンパクトシティへと変わっていつている。あとはこれから先を考えると低炭素社会や、農業問題や高齢化問題を考えていく必要がある。小田原を観光という形だけで引っ張るのも良いが、小田原の産業は何だろうかと思った。工業都市かというところでもない。これから何に向かえば小田原の産業になっていくのかを考えていかないと本当の意味で地域発展はないのでは。農業は小田原はよく自然に恵まれているというが、それを産業としてどう活かすのか。その点で農業をもっとクローズアップしても良いのではないか。そうしたら、地下のスポットで地産地消のようなことをやって、「小田原の自給率は神奈川No.1」のようなものになったら良いと思う。

a =朝どれふぁ～みは5億ぐらい売上があるので、底力はある。地下街への進出の話をした際には良い反応はなかった。一つの口説き方があるのではないかと。

佐 谷＝地下街に対する固まったイメージを払しょくすることが必要

a =街に来ることが楽しいような、何をきっかけにしていくか。先日小樽に2日間いたが原宿の様な若い人の集まる場所になってしまって、建物は活かされているのだが、それでも100年は経っていないような感じになっている。逆に、良いなと思う箇所には人は行っていない。(活かされてない)。

運河の再生があって、裕次郎記念館、北一ガラスが10数店舗ぐらい展開し、そこにお菓子屋さんや他業種も参入したり、ものづくりの人も入ってきたり、若い人も入ってきている。

運河沿いはあまり人がいなかった。もっと散策すると交通博物館があるが離れている。人は2キロ離れていると歩かない。せいぜい4～500m程度。良いかたちで建物やレンガが残っている

松 本＝良いまち・人がまた訪れたいくなる街というのは、強烈な個性はあれど、きちんとした規制がある。それを活かしながら変えていくものと変えないものをはっきりしているところ。無秩序に開発するのではなく、街にアイデンティティがある。小田原の場合は、地域特性があり、観光客も年間500万人訪れるその特性をどうして活かしていくのか、時流に合った提案がほとんどできていない。このチャンスをつかみに活かしていくのかをやっていかないと持続的に行かない。伸びしろはあるし、すぐ機会を損失しているように思う。

中心市街地の部分にも、イベントだけやるような観光課ではなく、きちんと新しい機軸を打ち立てていくような観光政策というものが必要になってくる。

a =街かど博物館にずっと案内をする人など、街の持っている力・余力がしっかりと浸透されていない。市・行政が街の中に入ってきていない。小樽ではそれがある。子供達も教育の一環で街を歩いている(勉強をしている)。小田原だって建造物を

案内したり(老櫛荘・静山荘など)ただハイキング気分で自分勝手に歩くのではなく、もう少し普通にあったら。そういう拠点が地下街にあったら。

- b =ハードだけをとって決めていくのではなく、どう動かすかのソフトウェアの方、自分たち市民の仕事だと思う。

意見交換の後、今後の開催日について出席者に確認をしたところ、下図の通りとなった。

	10月	11月
勉強会(全体)	10月19日(月)	11月27日(金)
A分科会	10月 6日(火)	11月 9日(月)
B分科会	10月 9日(金)	11月10日(火)

以上

<当日出席者> *順不同・敬称略

岩瀬照子、櫻井泰行、小野意雄、金井俊典、瀬戸衛、永峰康次、平井義人、古川達高、石田一夫、佐藤慎一、豊住武志、中戸川洋、古川孝昭